

ラテン・アメリカ大学成立に関する一考察(2)

皆 川 卓 三

目 次

- I はじめに
- II ラテンアメリカ諸大学の系譜—問題の所在
- III サントドミンゴ大学設立の教書と勅許状
—そのくいちがい
- IV アルカラ大学の設立と16世紀初頭の状況
- V メキシコ大学の誕生
- VI 神学優位の植民地大学
- VII おわりに

ラテン・アメリカ大学成立に関する一考察(2)

皆川卓三*

I はじめに

前稿においては、初期はもとより、ラテンアメリカがスペイン植民地であった3世紀(16～18世紀)にわたり、ラテンアメリカ大学設立の基本条件として、学位授与権などを認めるローマ教皇許可状(教書, bula)よりも、スペイン国王の発する設立認可勅許状(cédula)が、優先的に必要であること、この国王の優先権は、その保有する「インドに関する国王の聖職者叙任権(El Patronato Real de las Indias)」に根拠があることを明らかにした。

だがそこでは、設立されたラテンアメリカ植民地大学が、どんな特徴、たとえばどんな学部・学科・講座編成をもったか、本国スペインの既設大学のいかなるものに模して設立されたか、つまりはどんなモデル移植が行われたか、というような問題は、これを不問のままに残した。

本稿では、これを受けて、サントドミンゴ、メキシコ、サンマルコス初期設立3大学を中心に、ラテンアメリカ植民地諸大学が保持した特徴、学部・講座編成などを明らかにし、本国スペイン既設大学とくにサラマンカ大学やアルカラ大学との関係を明らかにすることを目的とする。

II ラテンアメリカ諸大学の系譜 — 問題の所在

イルデフォンソ・リアル(Ildefonso Leal)はその著「カラカス大学237年史」の1節で、次のように述べている¹⁾。

“大多数のラテンアメリカ大学の学則は、直接的にもせよ間接的にもせよ、サラマンカ大学とアルカラ・デ・エナーレス大学のそれに模して作成された。たとえば、サラマンカ大学はメキシコやリマの大学に影響を及ぼし、メキシコやリマがサンタフェ・デ・ボゴタの大学に影響を与えた。アルカラ・デ・エナーレス大学はサントドミンゴの大学に、サントドミンゴがカラカス大学やアバナ大学に影響を及ぼした…”と。

つまり、ラテンアメリカ諸大学の原型もしくはモデルは、学則という点で、本国スペインのサラマンカとアルカラの2大学である、と言うのである。言葉をかえて言えば、ラテンア

* 大学教育研究センター客員研究員/神奈川県立衛生短期大学教授

メリカ大学の源流は2系統あって、サラマンカ系とアルカラ系とに2分されると言う。だがほんとうに、イルデフォンソ・レアルの言うほどの明瞭な2系統区分が、ラテンアメリカ大学について言えるのであろうか。

アルカラ大学をもラテンアメリカ大学の1源流に据えるイルデフォンソの見解は、従来のラテンアメリカ大学史の通説に、新しい1説を加えたものと言うことができる。

従来、一般的には、ラテンアメリカ大学の設立について、とくにサラマンカ大学がモデル移植されたという見解がもっぱらとられて来た²⁾。たしかに、スペインがラテンアメリカを植民地領有したころ、既設スペイン大学の中でもとくにサラマンカがぬきんでて勢威を誇り、本国宮廷やインド枢機会議をかためる国王側近政治家たちは、サラマンカの‘サンバルトロメ大学寮 (Colegio Mayor de San Bartolomé)’出身者が多かったのであるから³⁾、設立において国王主導型ともいべきラテンアメリカ大学が、サラマンカに模して作られたという説には、人びとを納得させるだけの根拠がある。

だが、この説に異論をさしはさむ余地はないものか。ラテンアメリカ大学の設立状況を仔細に眺めて、ほんとうにそういうことが言えるだろうか。

このことを具体的に検討するためには、いくつかのラテンアメリカ大学設立状況を考察することが必要となろう。

Ⅲ サントドミンゴ大学設立の教書と勅許状 — そのくいちがい

サントドミンゴ大学は、すでに明らかなように(前稿)、ドミニコ会士がその修道院内に開設していたストゥディウム・ゲネラーレを前身とする。かれらはこのストゥディウムの大学昇格をめざし、a) アルカラ大学タイプの b) 学位授与権をもつ c) 教授陣のたしかな d) 本国諸大学と同様の学則・諸特権を保有する大学設立許可を、まずローマ教皇庁に対して請願したのであった。これに対し、1538年10月28日、教皇パウロ3世 (Paulo III) は教書 (In apostolatus culmine) を発し⁴⁾、ドクトール (doctor) やマヒステール (magister) の学位授与権を承認し、“アルカラやサラマンカの大学が保有すると同様の免除特権”をふくむ自由を、この大学に与えたのであった。

さらにサントドミンゴ大学は、1558年2月23日付のスペイン国王フェリペ2世 (Felipe II) の設立勅許状を下付される⁵⁾。この文書によると、国王はサントドミンゴ市当局や私人ゴルホン (Hernando Gorjón) の大学設立のための寄贈行為を称揚しつつ、この大学に“サラマンカのエストゥディオならびに大学が保有すると同様の特権を承認する”と述べている。

教皇と国王の両文書において、まず気づかれるのは、前者において“アルカラやサラマンカの大学と同様の免除特権”として、両大学に言及しているのに、後者の国王勅許状では、アルカラのことには全く触れていないことである。とすれば、教皇庁はサラマンカと同様にアルカラ大学を高く評価しているのに、スペイン王室は、伝統格式あるサラマンカ大学だけ

を認めて、アルカラを軽視もしくは無視していることになる。そこで次のような疑問が提出される。教皇庁がアルカラ大学を高く評価した根拠は何か。そしてなお、16世紀初頭、1530年代のアルカラ大学はどんな状況を示していたのか。アルカラは、スペイン王室の低い評価を受けるほど、質的に問題ある状況にあったのか、ということである。この疑問をとき、後の考察の助けとするため、ここでしばらく、16世紀初頭のアルカラ大学を眺めることにしたい。

Ⅳ アルカラ大学の設立と16世紀初頭の状況

現在のスペイン・マドリッド大学の前身をアルカラ大学とし、その設立年を1508年とするものがある⁶⁾。もしこの説に従うとするなら、教皇パウロ3世がサントドミンゴ大学に教書を発した1538年は、アルカラ大学が誕生してからわずか30年後のこととなる。

さてアルカラ大学にも、その設立前後には若干の経緯がある。いまこれを、いくつかの資料⁷⁾を参照しつつ、概述すれば次のようになる。

(前史) 1293年、カスティリャ王サンチョ4世(Sancho IV. 在位1284-1295)は、エナレス川のほとり、マドリッドから33km離れたアルカラに、ストゥディウム・ゲネラーレ設立計画をもったが、これは実現しなかった。だが15世紀末まで、この地にあるフランシスコ会修道院には、文典と教養諸科の学習があったことが確認されている。1459年、トレド大司教カリリョ(Alfonso Carrillo)が、教皇ピオ2世(Pío II)から教養3講座の開設許可教書を得たが、とくにその後、大学にまで発展の気配は見られなかった。

(設立とサラマンカ大学の反対) アルカラ大学設立への真の一步がふみ出されたのは、ようやく1499年になってからのことである。この年、スペイン出身の教皇アレハンドロ6世(Alejandro VI)は、かねてから請願するトレド大司教ヒメネス・デ・シスネロス(Jiménez de Cisneros)に対し、サラマンカの“エル・ビエホ(El Viejo)学寮”やポロニアの“スペイン学寮”⁸⁾が保有すると同じ特権をもち(とくに学位授与権)、“神学・教会法・教養諸科の学習が行われる学生のための学寮”設立を認可する旨の教書を発する。ヒメネスはこれを受けて、年来の構想であった学寮中心の新大学建設にふみきったのである。

アルカラ新大学建設計画を聞き知ったサラマンカ大学は、自己に対して強力な競争者が現われるのを恐れ、人を派して⁹⁾、ヒメネスがこの計画を断念するようにと説得し、その構想をサラマンカ大学においても実現することが可能であると申出る。

これに対してヒメネスは“なるほどサラマンカ大学では、ローマ法(市民法)や教会法の教授は十分に行われているが、神学の教授は満足すべき状態にはない。自分がその大司教管区の中に1大学を設立したいのは、教会諸学の教授のためであって、サラマンカに害を与えようなどとは毛頭考えていない。アルカラでは法学の教授を行うことはない”と答えて、サラマンカ大学の申出を拒絶したのであった。拒絶されたサラマンカおよびその卒業生たちが、

アルカラに好意を抱くことができないのは当然で、これが宮廷に反映して、前述サントドミンゴ大学勅許状でアルカラに言及することがなかった理由と考えられはしまいか。

(学寮制大学 — サンイルデフォンソ学寮開設) ヒメネスの構想するアルカラの新大学は、奨学金の支給を受ける学生がそこに居住し、そこにおいて講義が行われ、そこでは学位授与まで行うことができる「学寮」を設立し、これを大学の中心施設とする、生活に密着しながら密度の濃い学習を与える大学というのであった。スニガはこれを Colegio-Universidad (学寮—大学) とよんでいるが、ここでは学寮制大学とよぶことにしよう。

ヒメネス・デ・シスネロスがアルカラに最初に設立した学寮は、サンイルデフォンソ (San Ildefonso) と命名され、ここに33名分の奨学金が設定され、1508年7月24日、最初の7名の学生が入寮した。アルカラ大学の設立年をラシュドールのように1499年とするのは、教皇アレハンドロ6世の認可教書発布の年をとってそうするのであるが、前述のように1508年開設とするのは、この実際の大学機能開始年、つまりサンイルデフォンソ学寮開設年をとっているのである。

同年10月18日、1名のレクトール (rector, 学寮長) と3名のカンシラリオ (cancilario, consiliarius, 代議員) の最初の選挙が行われたが、以後、かれら役職者の選挙は毎年行われ、再選を許さぬさだめとなった。学位認定権者すなわちチャンセラールには、はじめサンフスト (San Justo) 修道院長が兼任で任命されたが、これが慣行化・伝統化して1830年までつづく。

ヒメネスはアルカラに、サンイルデフォンソにつづいて、いっしょに5学寮を設立する。そのうち、サンエウヘニオ (San Eugenio) 学寮は文典学習を、サンイシドロ (San Isidoro) 学寮は文典とラテン語・ギリシア語学習を、サンタバルビーナ (Santa Balbina) 学寮は弁証法とアリストテレス哲学の学習を、サンタカタリーナ (Santa Catalina) 学寮は自然哲学と形而上学の学習を、サンペドロ・イ・サンパブロ (San Pedro Y San Pablo) 学寮はとくにフランシスコ会修道士13名に学習を与える目的で設立された。さらに1514年にラマドレ・デ・ディオス (La Madre de Dios) 学寮、1528年にサンヘロニモ (San Jerónimo) 学寮 — 別号コレヒオ・トリリングエ (Colegio Trilingüe; 3ヶ国語学寮) — が設立され、前者には神学生13名分・医学生6名分の奨学金、後者にはラテン語12名・ギリシア語12名・ヘブライ語6名合計30名分の奨学金が設定される。

サンイルデフォンソ学寮とこれら7学寮との関係はどうかと言えば、各学寮レクトールをサンイルデフォンソのレクトールが任命することになっていたから、サンイルデフォンソの優位は疑う余地がない。なお各学寮で講義する教授の任命は、各学寮ごとにレクトールが行うことになっていた。

(神学中心) このアルカラ大学がめざす学習の重点は何であったか。すでに前述のサンイルデフォンソ設立状況から明らかのように、これをひとくちで言えば、神学の学習と研究にその重点があった。教会法といえども、それはもっぱら神学学習の補助科目として学ばれたのであり、ヒメネスがサラマンカ大学に対して明言したように、そこでは法学(ローマ法)

の学習は全く禁ぜられており、アルカラにローマ法学習が導入されたのは、約1世紀後17世紀に入ってからのことであった。

アルベルト・ヒメネスは、サンイルデフォンソ学寮を中心とする諸学寮の学習状況、さらにまた諸学の学習順序から、16世紀初頭のアルカラの学部(学科)・講座編成は次のようであったと述べている¹⁰⁾。

“アルカラ大学は大きく分けて教養部(科)と神学部(学科)の2学部編成で、前者の修業年数は4年、初等論理学・論理学・自然哲学・形而上学の4コースがあり、そこでの諸学の学習に加えて、ラテン語・ギリシア語・ヘブライ語の習得が行われる。教養部での学習を基礎にして、神学部の学習にすすむ。それは主としてサンイルデフォンソで与えられる。神学部の主要中心講座は聖トマスアキナス神学(tomista)、ドゥンススコトゥス神学(escoista)、唯名論(nominalista)の3神学講座で、フランシスコ会のドゥンススコトゥス神学の導入は、トマスアキナス神学を主流とする神学学習に新機軸を与えるものとして、全スペインに大きな衝撃を与えた。前述のようにそのほか教会法2講座は、中心3神学講座の補助科目的位置にとどまる。教養部レベルには医学2講座があり、ここではアビセーナ(Avicena)、イポクラテス(Hipócrates)、ガレーノ(Galeno)が学ばれたが、これにすすむには、論理学と自然哲学の学習が不可欠の準備学習とみなされた。”

これを要すれば、アルカラ大学は神学中心大学と言うべく、そのカリキュラムは神学主導型である。

従来“パリ大学が北ヨーロッパ諸大学のモデルであるとすれば、ボロニア大学がイタリア・フランス南部・スペイン諸大学のモデルである”と言われる¹¹⁾。スペイン大学がボロニア型といわれる意は“学生中心、法学中心、私人・町・国王設立”ということなのであるが、たしかにアルカラ誕生までの、サラマンカをはじめとするスペイン大学は、このタイプにあてはまるものであった。ところがアルカラは、学寮のレクトール選出方法やレクトールの教授任命権をみれば、学生中心とも言うべく、サラマンカと同じボロニア型と言えなくはないが、神学中心という点ではパリ大学型と言うべきである。つまり神学主導型アルカラ大学誕生は、スペイン大学史の上で一つの大きな変革的事件であり、画期的事件であったと言ってよい。

(アルカラ3ヶ国語対照聖書刊行)さて、ラテンアメリカのサントドミンゴ大学設立において、ドミニコ会士が要請したのは“アルカラ大学タイプの、教授陣のたしかな”それであった。もはや言う必要もないことであるが、それは神学学習を中心とする、いわゆる神学主導型大学を要請したのであった。

だがそれにしても、ドミニコ会のような修道会が神学中心の大学設立を要望したのは、当然と言えば当然のことだと考えられる。かれらはただ神学学習に重点のある大学ということだけに魅力を感じたのであろうか。教皇庁も高く評価するような、もっと魅力ある側面が、アルカラにはあったのではあるまいか。これを明らかにするため、アルカラをもう少し詳細に調べてみよう。

ヒメネス・デ・シスネロスの、アルカラ大学設立とならぶもうひとつの業績は、かれがアルカラに集めた諸学者の力を結集して、「アルカラ3ヶ国語対照聖書 (Biblia Poliglota Com-pultense)」全6巻を編纂・完成せしめたことである。その第1巻は1514年に刊行され、最終巻はかれの死の4ヶ月前の1517年7月14日に刊行された。この出版事業にたずさわったのは、デメテリオ・ドゥカス (Demeterio Duas, クレタ生れ, ギリシア語教師), エルナン・ヌニェス (Hernán Núñez, サンチアゴ修道会長, ギリシア語講座担当), ファン・デ・ベルガラ (Juan de Vergara, トレド生, アリストテレス学者), バルトロメ・デ・カストロ (Bartolomé de Castro), ディエゴ・ロペス・デ・スニガ (Diego López de Zúñiga), アントニオ・デ・ネブリハ (Antonio de Nebrija), アルフォンソ・デ・サモラ (Alfonso de Zamora) などで、かれらはその学識をもってアルカラに名声をもたらし、アルカラ大学をしてスペイン・キリスト教的人文主義の中心地という名誉ある評をかちとらしめたのであった¹²⁾。教皇庁が高く評価し、サントドミンゴのドミニコ会士が憧れたのは、まさにこのような栄誉あるアルカラ大学とその教授陣であった、とすることができる。

さて、サントドミンゴ以外のラテンアメリカ諸大学は、アルカラとどんな関係にあったか。

V メキシコ大学の誕生

(神学中心型大学) 1551年9月21日、スペイン国王カルロス1世 (Carlos I) は、トロ (Toro) においてメキシコ大学設立2勅許状を発し、“この大学で学習する者に、サラマンカのストゥディウムおよび大学が享受すると同様の自由”を認め、設立のために黄金1000ペソを国庫から支出することを命ずる¹³⁾。

この設立勅許状下付までには、やはり若干の設立努力の前史がある。メキシコのアステカ・インディオ帝国の首都テノチティラン (Tenochtitlan) が、凄惨な戦闘ののち、スペイン人征服者コルテス (Hernan Cortés) によって占拠され、帝国が崩壊したのは1521年8月のことである。この征服の余燼がいまださめやらぬメキシコの土地に、いちはやく入国し、布教と教育の活動をはじめたのがフランシスコ会やアグスティン会・ドミニコ会の修道士たちであった。かれらは修道院を建設し、その中で、文典・教養諸科・神学・哲学の学習を開始する。なかでももっとも充実していたのが、サントドミンゴ修道院内でのそれで、1534年ないし35年ごろには、パリ大学やサラマンカ大学の卒業生を教師にして、神学と教養諸科を教授し、ストゥディウム・ゲネラーレの体裁をととのえていたと言われる¹⁴⁾。だがこれらの高等レベルの学習といえども、各修道会ごとに個々ばらばらのものであり、1つのまとまった大学となるにはほど遠い状態にあった。

メキシコ大学設立への公的第1歩がふみ出されたのは、メキシコ大司教スマラガ (Juan de Zumárraga) の、1536年国王への設立請願書簡と、初代副王メンドサ (Antonio Mendoza) およびメキシコ市会の、1537年設立請願書が提出されてからのことである。スマラガは、教

師の給料や建物の建設費用を調達するために、自己の年収を提供すると申添え、またメンドサや市会は、スペイン人子弟が本国スペインへ遊学するために冒さなければならぬ危険を配慮して、設立許可を懇請したのであった¹⁵⁾。

これらの請願書が提出されてから、国王勅許状下付までには10数年の歳月がかかっている。だがこの間にも、メンドサは教師の採用に腐心し、市会は本国宮廷に代理人を設定して、請願の実現に努め、ようやく1551年勅許状を入手したのである。勅許状下付から2年遅れて、1553年、第2代副王ベラスコ(Luis de Velasco)のとき開学式が催おされ、エステノスによれば“神学、聖句集、教会法、法学、人文・哲学、修辞学、文典”の7講座をもって開講された¹⁶⁾。この講座名の列挙において、神学や聖句集・教会法など教会関係諸学が法学に優先していることに注目されなければならない。

ラロジョは、開学当時のメキシコ大学の組織についてかなりくわしい記述をするが、16世紀末の大学最高運営・議決機関としての教授会(Claustro)の構成を述べる箇所¹⁷⁾、レクトールやチャンセラーとならんで、神学と教会法の教授代表を筆頭にかかげている。このことから、神学・教会法の講座が席順から言って最高の位置にあったと理解してよさそう。メキシコ大学もまた、学科・講座編成から言って、サラマンカのような法学中心ではなく、神学中心もしくは神学主導型の大学に分類することができる。

(ジェズイットの到来 — 学寮開設)ところでメキシコ大学が、開学以来10数年、つねに悩みつづけた問題は、教授人員の不足と入学生の基礎学力欠除ということであった。

前者はともかく、後者の問題はどうか解決されたであろうか。いまこれをひとくちで言えば、ジェズイット会士が学寮制を導入することによってであった。それはどんなすじみちで行われたであろうか。

すでに明らかなところでは¹⁸⁾メキシコ市会の要請によって、ペドロ・サンチェスほか15名のジェズイット会士がメキシコ市へ到着したのは1572年9月28日のことであるが、かれらはローマ駐在ジェズイット会本部長フランシス・ボルヒア(Francis Borgia)に、とくに選ばれてこの地へ派遣されたのであった。1571年春、ボルヒアはローマにおいて、スペイン国王フェリペ2世から同年5月4日付の親書を受けとった。この親書は、ジェズイット会士をメキシコに派遣し、その地で青年にたしかな教育と訓練を与え、メキシコ大学に入学してもじゅうぶん学習にたえられるような基礎学力を付与してもらいたい、という意の依頼状なのであった。

フェリペ2世がジェズイット会本部長にわざわざ書簡を送ったのにはわけがあった。その頃、メキシコでは、征服者・植民者であるスペイン人たちの子弟が柔弱化し不良化して、大学へ入学しても学力が低く、とうてい大学教育にたえられないという困った状態にあった。せっかく懇請して設立したメキシコ大学なのに、入学生たちが怠惰と逸楽の生活になれて、学習に打込まない、基礎学力が不足して大学の授業について行くことができないという悲観的な状況を呈していたのである。これにほとんど困りはてた親たちが、市会を動かし、

国王に対して、青年教育に適確で有能な教師派遣を懇請したのであった。国王フェリペ2世は、このメキシコ市会の懇請にこたえ、メキシコ青少年教育とメキシコ大学教育振興のために、ジェズイット会士の派遣方をボルヒアへ依頼したという次第なのであった。

ジェズイット・ローマ本部が、この国王の信任にこたえるべく、いかに慎重な人選を行ったかは、派遣会士の長としてペドロ・サンチェスを選んだことからでも知ることができる。実にこのペドロ・サンチェスは、ジェズイット入会前、かのアルカラ大学でレクトールであったことがあり（それは何学寮で、いつのことか不明）、しかも派遣任命があった1571年7月当時、かれはあの中心学寮サンイルデフォンソのレクトールであり、しかも神学講義を担当していたという有能な神学者なのである¹⁹⁾。

ペドロ・サンチェスたちメキシコ・ジェズイット会の教育活動のうち、とくにめざましいのが、学寮制教育をメキシコへ導入し、メキシコ大学の内外において、この学寮教育を通して、大学の教育に寄与したことである。

かれらが最初に経営した学寮は、当時メキシコ大聖堂の財務担当官であったフランシスコ・ミチョン・ロドリゲス・サントス(Francisco Michón Rodríguez Santos)の寄贈により、1573年8月15日に開寮した“サンタマリア・デ・トドスサントス(Santa María de Todos Santos)”学寮である。ここには得業士号(bachillerato)を取得したもので、素質はあるが経済的に貧しく大学でこれ以上学習を継続すること困難なものを入寮させることとなり、10名分の奨学金が設定された。奨学生の内訳は神学生4、教会法学生4、哲学生2である²⁰⁾。寮生の1人が奨学生たちによってレクトールに指名される（だから、奨学生以外に自費の入寮生がほかにいたようだ）。これら学寮規則は、ペドロ・サンチェスが、自己の母校スペイン・バリャドリド大学の“サンタクルス(Santa Cruz)”学寮規則に模して作成したといわれる²¹⁾。

[サンタマリア・デ・トドスサントス学寮は、1700年4月1日、国王布告により、大学寮(Colegio Mayor)と称することを勅許され、学位授与権をも付与される。この学寮はメキシコ独立後の1834年閉鎖されるまで、270年の命脈を保ち、メキシコ大学の中心施設として植民地メキシコに多くの聖職者・官吏・法律家を送り出す。]

ところで、ペドロ・サンチェスたちジェズイット会士がメキシコに招請されたのは、青少年にたしかな教育と生活訓練を与え、大学の学習にたえられるような基礎学力を付与するのが主目的であった。この期待される目的に、かれらはどのようにこたえたであろうか。

1573年9月、富裕な主だった市民7名が後援会を結成し、基金をもち寄って、自分たちの息子がそこで生活し、そこでラテン語を中心とする学習を営むことができるような学寮を建設し、その指導をジェズイット会士に委託するというプランを結実させた。その学寮は、“サンペドロ・イ・サンパブロ(San Pedro y San Pablo)”である。やがて後援者たちが経営理事となり、財政的・物的運営を引受け、ジェズイットは学生の生活訓練と文典・教養科目の教育を担当することになった。当初レクトールはペドロ・サンチェスで、のちに理事会が選出することになった。入寮者の決定は後援者や理事会の推薦・指名により、ジェズイット

は口出ししない約束で、この学寮の経営がはじまる。このことがあとで両者の不和の原因となり、ジェズイットがたもとを分つことになるのだが、ここでは、この学寮の名称が、あのアルカラのヒメネス・デ・シスネロスが寄贈設立した、フランシスコ会修道士のための“コレヒ・デ・サンペドロ・イ・サンパブロ”と同じであることに注目しておきたい。

さてここにメキシコ大学の周囲には、サンタマリア・デ・トドスサントスとサンペドロ・イ・サンパブロの2学寮ができた。だが両学寮あわせてもせいぜい300人の寮生収容力しかなく、しかもその教育の成果が注目を浴びるようになって、子をもつ親たちの入寮希望は急速に大きくなる。そこで適齢青少年を子にもつ親たちが結束し、副王や大司教にジェズイット経営の新学寮増設を要望する。ここに相ついで設立されたのが、“サングレゴリオ (San Gregorio)”, “サンベルナルド (San Bernardo)”, “サンミゲル (San Miguel)”の3学寮で、およそ1574年の前半ごろに発足する。学寮生は寮内でジェズイット会士からラテン語教授を受け、そのあとで大学の講義を聴くという学習生活を営んだ²²⁾。

ところが1583年になり、ジェズイット会は、サンペドロ・イ・サンパブロ、サングレゴリオ、サンベルナルド、サンミゲルの4学寮を、“サンイルデフォンソ学寮”なる統一名称のもとに統合する²³⁾。なぜジェズイットが4学寮を名称的に統一したかの理由は不明だが、かれらにとって、そのほうが運営が円滑に行くと考えたからではあるまいか。諸資料によっても、サンイルデフォンソという統一名称の由来は明らかではない。がしかし、ここでもまた、アルカラ大学の中心学寮サンイルデフォンソと同名であることに注目しよう。推測だが、ペドロ・サンチェスは、みずからがかつてそのレクトールであったアルカラの中心学寮名を付し、これにあやかって、やがてはこの学寮をメキシコ大学の中心施設にまで育てあげたかっただけではあるまいか。事実、メキシコ・サンイルデフォンソ学寮は、次に述べるように、メキシコ大学のなかでも有力な地位を占めるまで発展するのである。

それはともかく、1588年、この統合に不満なサンペドロ・イ・サンパブロ学寮理事会は、統合サンイルデフォンソから脱して、独立の学寮経営をつづけることにするが、これはやがて消滅の運命におちこむ。

他方、統合サンイルデフォンソは副王から公式の設立を認められ、充実発展して行く。そしてついには、1618年1月17日付フェリペ3世の布告により、「サンイルデフォンソ王立学寮 (Real Colegio de San Ildefonso)」の名称を与えられ、12名分の国王奨学基金を下付される。学生に支給される奨学金の期間は6年、そこでは神学と哲学が学ばれ、得業士号が授与される。得業士号取得後は1年間の猶予期間が与えられ、その間に学生は、大学でさらに上級の学習をつづけるか、外に出て僧職につくか、または法曹・行政職を求めると決定する、というさだめとなった。サンイルデフォンソ学寮は、メキシコ独立後もなお命脈を保ちつづけ、現在のメキシコ国立自治大学 (UNAM) に併設の“国立プレパトリア校 (Escuela Nacional Preparatoria)”となるのである²⁴⁾。

ところでジェズイットはこの時期に、なおもう1つの学寮を経営している。それが“サン

ペドロ・イ・サンパブロ最高学寮 (Colegio Máximo de San Pedro y San Pablo) ”である。この校名は、寄贈者アロンソ・ビリャセカ (Alonzo Villaseca) の希望に由来すると伝えられるから²⁵⁾、必ずしもアルカラ大学との直接関係を見出すことはできないが、当時スペイン本国でもサラマンカと肩をならべるほど名声の高いアルカラ大学 (その学寮) を、ビリャセカが全く関知しなかったとは言いきれず、寄贈相手のジェズイット代表者ペドロ・サンチェスから、アルカラについて何がしかの知識を得たことも考えられる。そしてなお、この学寮の教育を担当したジェズイット会士たちのアルカラとの密接な関係を見ると、当然のことながら、この学寮の教育もまたアルカラ大学と強くむすばれていたと考えられるのである。

すなわち、1576年、メキシコへ新たに到着した7人のジェズイット会士のうち、代表的人物と目されるペドロ・オルティゴサ (Pedro Hortigosa) は、アルカラ大学で道徳哲学を講義した経歴をもつ神学者・哲学者で、メキシコ到着後は、この学寮とメキシコ大学の両方で講義を担当している。かれと同行して同じく学寮と大学で哲学を講義し、21年にわたり教授職にあったアントニオ・ルビオ (Antonio Rubio) もまた、かつてアルカラ大学で教授の職にあった²⁶⁾。かれら2人の学識の高さを聞き知った当時の大司教モヤ・イ・コントララス (Moya y Contreras) が、かれらをメキシコ大学教授職に加えたのであった。アルカラ大学の神学学習のレベルがいかに高く、いかに名声を博していたかを証明する事実であると同時に、このことは、アルカラ大学の教育や学風が、ジェズイットを介して、メキシコ大学へ滲透したことを示すものと言えよう。

ここでまとめて、次のようなことが言えるのではあるまいか。メキシコ大学は、学則にあらわれた組織・運営の側面ではサラマンカを模しているのだが、その学科構成・神学主導型のカリキュラム・学寮運営等、内部的教育的側面ではアルカラ型神学主導型の大学であった。妥協的に言って、外面的にはサラマンカ、内実的にはアルカラの、いわば混合型の大学であった、と言えなくもないが、筆者は教育の内容面を重視する立場に立って、メキシコ大学はアルカラ大学型であったと言いたい。しかもそれは、他の植民地期ラテンアメリカ諸大学の共通特徴であったと考える。それでは、ペルー・サンマルコス大学など他の諸大学のカリキュラムはどうなっていただろうか。

Ⅵ 神学優位の植民地大学

(サンマルコス大学) ペルー・サンマルコス大学は、バルカルセルによれば、ラテンアメリカ最古の設立年をもつ大学である。かれは、スペイン国王の設立勅許状を教皇の学位授与権認可教書に優先させ、ラテンアメリカ大学は、植民地行政一切を統轄するインド枢機会議の議を経た国王勅許状下付の年月日をもって、その設立年とすべきだと主張する。その立論の根拠に、スペイン国王の保有する「インドに関する国王聖職者叙任権」があったことは、すでに前稿で考察した。

サンマルコス大学の設立勅許状は、1551年5月12日バリャドリド (alladolid) においてカルロス1世が発布した。この勅許にいたるまでには、リマ駐在のドミニコ会とリマ市会の両者が提携しての努力が何年か続いている。この勅許状がリマに到着したのが1552年末のことで(当時の交通事情による)、1553年1月2日、リマの行政官や大司教をはじめとする聖職者が、ドミニコ会修道院の会議室に集り、国王の名において大学設立を宣誓する。ここにドミニコ会ロサリオ (Rosario) 修道院に大学が開設された。初代レクトールはファン・パウティスタ・デ・ラ・ロカ (Juan Bautista de la Roca) である²⁷⁾。

1562年ごろ、ロサリオ修道院の1室をかりて行われる講義は、文典と論理学と神学にしすぎなかった。1566年、サンマルコスに対して、スペイン国王が、いかなる講座を王室より寄贈してもらいたいかと問うたとき、大学は、法学2講座、教会法2講座、文典2講座、医学2コース1講座、神学1講座を下賜いただきたいと答えている²⁸⁾。独立の建物・施設ももたず、まだサンマルコス大学は、大学の名にふさわしい教育内容・講座編成ではない。

1571年7月25日、ローマ教皇ピオ5世 (Pío V) の認可教書が発せられる。ここにサンマルコスは“国王と教皇”の大学となる。バルカルセルの書や“サンマルコス400年史”には、この頃、どんな講座があったかの記述がないが、それから10年後、1581年学則を紹介するところで、バルカルセルは、サンマルコスには次のような講座があり、しかもその年俵がいくらであったかが分ると言う²⁹⁾。いまこれをそのまま列挙してみよう。

[講 座 名]	[年俵]
1) 神学プリマ講座 (Prima de Teología)	1, 000 ペソ
2) 法学プリマ講座 (Prima de Leyes)	1, 500
3) 教会法プリマ講座 (Prima de Cánones)	1, 500
4) 聖典講座 (Sagrada Escritura)	800
5) ローマ法原論講座 (Instituta)	500
6) 神学ビスペラス講座 (Vísperas de Teología)	700
7) 法学ビスペラス講座 (Vísperas de Leyes)	1, 000
8) 教会法ビスペラス講座 (Vísperas de Cánones)	1, 000
9) 教令集講座 (Decreto)	1, 000
10) 道徳神学講座 (Teología Escolástica o Moral)	600
11) 教養科3講座 (Tres Cátedras de Artes)	各 500
12) 土語講座 (Lengua de la Tierra)	600
13) ラテン語3講座 (Tres Cátedras de Latinidad)	400
	または300
	または600

これらの年俵は当時の副王トレド (Toledo) が指定したものと言われるが、この講座の中に、インカ帝国のインディオたちが話していたケチュア語つまり土語の講座があるのが興味

深い。征服者スペイン人たちはインカ帝国領であったところを支配するため、土語をも学習の対象にしたのであった。

だがそれにもまして興味深いのは、講座年俸の額が示されていることである。もしその年俸額が、その講座の大学教育内における重要度をあらわすものとすれば、法学と教会法がもっとも重要で、神学がこれに次ぎ、教養諸科は低い位置にある。しかし額の高低を離れて、講座の種別でこれを眺めると、神学関係講座（神学、教会法、聖典、教令集）の法学関係講座に対する数の比は 8 : 3 で、神学関係講座の相対的優位は無視することができない。もしそうとすれば、サンマルコス大学の 1581 年以降の教育は神学主導型に属する³⁰⁾。

この傾向は 17 世紀に入って一そう顕著となる。世紀の半ば、サンマルコスには次のような 5 学部があり、そこには合計 21 講座があったが、神学系講座の重要性はいっそう増している³¹⁾。

神 学 部（ 8 講座, 10 科目）

教 養 学 部（ 4 講座, 4 科目）

教会法学部（ 3 講座, 3 科目）

法 学 部（ 4 講座, 5 科目）

医 学 部（ 2 講座, 2 科目）

サンマルコス大学は神学主導型、つまりサラマンカよりもむしろアルカラ型の大学とし設立され、発展したとすることができる。

それでは、サンマルコス以外のラテンアメリカ植民地大学はどうか。

（**グアテマラのサンカルロス大学**）1676 年カルロス 2 世の勅許状で設立された、グアテマラのサンカルロス大学の実際の開講は、6 年後の 1681 年であるが、このとき開講されたのは神学 2 講座、教会法・法学・医学各 1 講座であった³²⁾。ここでもまた神学は優位の地位を占める。

ラテンアメリカがスペイン植民地であったのは、ほぼ 16・17・18 の 3 世紀間であったが、16 世紀設立のメキシコ、サンマルコス大学、17 世紀設立のグアテマラ・サンカルロス大学はもとよりのこと、18 世紀になって設立された諸大学もまた、学科・講座編成は神学を中心とするものであった。

（**ベネズエラのサンタロサ大学**）サンタロサ大学すなわちカラカス大学は、18 世紀初頭から設立運動が行われ、1721 年 12 月 22 日に国王フェリペ 5 世の勅許状、1722 年 8 月 19 日に教皇イノセンシオ 13 世の教書が下付され、1725 年、神学 2、教会法 1、法学 1、道徳神学 1、哲学 1、文典 1、音楽 1 の 8 講座で開設された。もとより中心講座は神学で、その講座担当教授の席も最上位にあった³³⁾。

（**チリのサンフェリペ大学**）チリのサンチアゴに設立されたサンフェリペ大学は、それまでの 30 年にわたる設立請願の努力が実って、1738 年に国王設立勅許状が下付された。このとき認められた講座は、神学 2、教会法 2、法学 2、人文・哲学 1、ラテン語 1、医学 1、数学 1 の 10 講座で、その後、修辞学と、ドゥンススコトゥス神学、ジェズイットのフランス

コ・スアレス研究の3講座が加わり、この中でもとくに神学講義が最も重んぜられている。新たに加えられた“ドゥンススコトゥス神学”とは、2世紀以上も前、アルカラ大学に設定され、当時の神学学習に新機軸を加えたものとして、全スペインの注目を浴びたあの“ドゥンススコトゥス神学講座”と同じであることを想起しよう。2世紀後のこんにちでも、アルカラはチリにおいて力強い影響を与えている。

サンフェリペ大学のなかで神学学習が尊重されている様子は、各講座ごとの登録学生数をみても、そのことがうかがえる。たとえば、開設以来1797年までの総登録学生数は794名で、その内訳は神学315、教会法・法学273、哲学180、医学21、数学5である³⁴⁾。教会職が当時のチリ社会でも高い評価を受けていることの反映であり、この大学が神学主導アルカラ型であることを示す。

Ⅶ おわりに

本稿は、ラテンアメリカ植民地時代設立の諸大学が、従来の通説のサラマンカ大学がモデルであった、あるいはイルデフォンソ・レアルのようなサラマンカとアルカラの2大学モデルであったという説に対し、むしろアルカラ大学こそ実質的にラテンアメリカ大学の原型であった、ということの立証につとめ、ほぼ所期の目的を達成することができた。

だが問題は、ラテンアメリカ大学が18世紀設立のものにいたるまで、神学中心の大学であったことから発生する。神学主導型大学であったことが、ラテンアメリカ大学の近代化に障害となったのではあるまいか。18世紀、欧米諸大学が新時代の自然諸科学を導入しはじめたとき、ラテンアメリカ大学はなお旧態依然として脱皮をはかろうとはしなかった。もとよりそれは、大学だけがそうであったのではなく、ラテンアメリカ植民地社会そのものの知的社会的風土が、近代科学の導入を妨げる前近代的精神的構造にあったからだと言えるであろう。

19世紀初頭、本国スペインがナポレオンにじゅうりんされる事件をきっかけに、各植民地は共和国として独立をはじめた。新独立共和国誕生後、既設ラテンアメリカ諸大学は、あるいは廃校、あるいは断絶、あるいは変革の運命にさらされる。加えて、新共和国の理念にふさわしい新大学が生れて来る。

もしラテンアメリカ大学史の研究が、なお今後にも続くとすれば、ただいま述べたような諸大学の変遷過程を考察することもまた、欠落することを許されないであろう。

〔 註 〕

- (1) Ildefonso Leal. *La Universidad de Caracas, 237 Años de Historia*. p.5. Edición Especial del Circulo Musical, Caracas, Venezuela, 1967.
- (2) たとえば最近では, Eric Ashby. *Universities : British, Indian, African*. pp.8-10. Harvard University Press, 1966.
- (3) たとえばパラシオス・ルビオス (Palacios Rubios) など. サンバルトロメ出身者はバルトロメオス (Bartolomeos) の異名を与えられるまでになる.
- (4) Ajo G. y Sáinz de Zúñiga. *Historia de las Universidades Hispánicas, Tomo II. El Siglo de Oro Universitario*. pp.464-467. Centro de Estudios de Investigaciones, «Alonso de Madrigal» Avila, Editorial y Gráficas Senén Marín, 1958.
- (5) *Ibid.*, p.535.
- (6) たとえば *Enciclopedia Americana* (1964年版). 「MADRID, University of.」の項.
私見では, マドリッド大学の前身は, 1821年公教育法にもとづいて, 1822年に設立された“中央大学 (Universidad Central)”とすべきである.
- (7) ラシェドール著, 横尾壮英訳. 『大学の起源 — ヨーロッパ中世大学史 —』(中), 106頁
昭和45年1月15日, 3版.
Vicente de la Fuente. *Historia de las Universidades, Colegios y Demas Establecimientos de Enseñanza en España. Tomo II*. pp.48-54. Imprenta de la Viuda é hija de Fuentenebro, Madrid, 1887.
A. G. y S. de Zúñiga. *op. cit.*, Tomo I. pp. 378-383, Madrid, Ed. La Normal, 1957.
Alberto Jiménez. *Historia de la Universidad Española*. pp.158-168. Alianz Editorial, Madrid, 1971.
- (8) “エル・ビェホ学寮” — サラマンカ大学のサンバルトロメ大学寮のこと. 諸学寮のうちもっとも古く設立されたので(1401年), 和訳して“古寮”(横尾訳)の名が与えられ, 通称となった.
“スペイン学寮” — ボロニア所在のサンクレメンテ(San Clemente)学寮のこと. ボロニア遊学のスペイン人学生のために, トレド大司教アルボルノス(Gil de Albornoz)の生前全財産遺贈で1367年開設. サラマンカのエル・ビェホのモデルとなった。
- (9) 教会法のドクトール Luna, 教養科教師 Ortega.
- (10) Alberto Jiménez. *op. cit.*, pp.165-167.
- (11) *ibid.*, pp.53-54.
- (12) *ibid.*, pp.168-170.
- (13) A. G. y S. de Zúñiga, *op. cit.*, pp.498-500.
- (14) *ibid.*, p.159.
Roberto Mac-Lean y Estenós. *La Crisis Universitaria en Hispano-América*. p. 113. Instituto de Investigaciones Sociales, Universidad Nacional, México, D. F., 1956.
- (15) A. G. y S. de Zúñiga. *op. cit.*, pp.159-161.
Roberto Mac-Lean y Estenós. *op. cit.*, p.114.
- (16) Roberto Mac-Lean y Estenós. *op. cit.*, pp.114-115.
- (17) Francisco Larroyo. *Historia Comparada de la Educación en México*. p.114. Editorial Porrúa, México, 1962, Sexta edición.
- (18) 拙著, 『ラテンアメリカ教育史 I.』96-98頁. 講談社. 昭和50年4月.
- (19) Jerome V. Jacobsen. *Educational Foundations of the Jesuits in Sixteenth-Century New*

- Spain. p.63. University of California Press, Berkeley, 1938.
- (20) J. *ibid.*, pp.85–86.
ラロジョはこの奨学生の内訳を神学4, 教会法3, 法学3の10名としている (Larroyo. *op. cit.*, p.117)
- (21) Jerome Jacobsen. *op. cit.*, pp.85–86.
- (22) *ibid.*, pp.123–124.
- (23) ラロジョは, サンイルデフォンソとして統合されたのは, サングレゴリオ, サンベルナルド, サンミゲルの3学寮だと言う (Francisco Larroyo. *op. cit.*, p.133.) .
- (24) Jerome Jacobsen. *op. cit.*, pp.131–132.
Francisco Larroyo. *op. cit.*, p.134.
- (25) Jerome Jacobsen. *op. cit.*, p.142.
- (26) *ibid.*, pp. 152–153, p.156.
- (27) Daniel Valcarcel. *Historia de la Educación Colonial*, Tomo II. p.110. Editorial Universo, Lima, Perú, 1968.
- (28) A. G. y S. de Zúñiga. *op. cit.* (Tomo II). pp.142–143.
- (29) Daniel Valcarcel. *op. cit.*, pp.151–152.
「サンマルコス400年史」では, これらの年俸金額は, これよりおよそ200ペソずつ少ない (La Universidad Nacional Mayor de San Marcos. IV^o Centenario de la Fundación de la Universidad Real y Pontificia y de su Vigorosa Continuidad Historica. p.88. Imprenta Santa Maria, Lima, Perú, 1950.)
- (30) 教会法を法学学習の一部に加えることもあるが, それにしてもその比は6:5である.
- (31) Daniel Valcarcel. *op. cit.*, pp.179–180.
- (32) Carlos González Orellana. *Historia de la Educación en Guatemala*. p.104. B. Costa-Amic Editor, México, 1960.
John Tate Lanning. *The University in the Kingdom of Guatemala*. p.7. Cornell University Press, New York, 1955.
- (33) Ildefonso Leal. *op. cit.*, p.4.
- (34) La Universidad de Chile, (1843–1934). pp.7–8, p.10.

A Study of the History of Universities
in Latin America (2)

Takuzo MINAKAWA*

(1)

It has been said before that almost all the universities in Latin America, which had been established during the Spanish colonial era, modeled themselves on The University of Salamanca in Spain. This traditional notion, to be sure, has a considerable persuasion which we can not easily reject, because Salamanca was one of the oldest and the most influential of universities in those days.

Is there no room for doubt about this notion? In my opinion, there is some dubiety and so we have to re-examine the conditions of those Latin-American universities.

(2)

About the 1530's, the Dominicans on the Island of Hispaniola made a request to the Pope for the recognition of establishing a university like that of Alcala, which had been newly established about 30 years ago. Then, what is the university of Alcala?

Jimenez de Cisneros, the archbishop of Toledo, initiated the university of Alcala in 1508 and aimed at the encouragement of the study of theology, on the ground that Salamanca had not offered enough of that study. Moreover, in 1510's he published in Alcala the six volumes of "Biblia Poliglota Compultense (The three languages Bible of Alcala)" which brought fame to Alcala in the Catholic world. These were the reasons why the Dominicans had demanded a similar university to that of Alcala.

Alcala had been the center for the study of theology in Spain in those days and had never offered jurisprudence until the 17th century, in contrast with Salamanca. In Alcala theology had been the central and most important chair. Moreover, let us note that Alcala was a so-called boarding-school and had many boarding-houses where students lived and studied theology. The "Colegio de San Ildefonso" was the most important one.

(3)

The University of Mexico was established by the order of the Spanish King in 1551, but during the first 20 years couldn't succeed in its instruction because of the lack of scholastic ability in the students. Therefore, the King and the town council of Mexico invited a group of Jesuits, headed by Pedro Sanchez, with the object of charging them with the training of Mexican youths.

The Jesuits established several boarding-houses in Mexico such as "Colegio de San Pedro y San Pablo", "San Ildefonso" and they succeeded in their commission.

According to his biography, Pedro Sanchez had been rector of "Colegio de San Ildefonso" of Alcala before his appointment to Mexico by the chief of the Jesuit Order. Moreover, the leading chairs of Mexico were theological.

* Affiliated Researcher, Research Institute for Higher Education / Professor, Kanagawa Junior College of Hygiene

In other universities, such as San Marcos in Peru, San Carlos in Guatemala, Santa Rosa in Caracas, and San Felipe in Chile, the theological chairs had also been the principal ones. Thus, we can conclude that Alcala had a more potent influence upon the Spanish colonial universities than Salamanca.

(4)

This paper deals with the main universities established in Spanish America during the colonial era, and attempts to make clear their curricula, chairs and their intimate relationships with the university of Alcala.

